

「 さ さ え 」

2018年4月発行 情報誌 第63号

発行 NPO福祉用具ネット事務局

住所: 福岡県田川市伊田 4395 (福岡県立大学内)

TEL/FAX: 0947-42-2286

E-mail npo-fukusiyogunet@sage.ocn.ne.jp

新 URL <http://npofukusiyogu.sakura.ne.jp>

情報誌「ささえ」は年4回(1月・4月・7月・10月)発行しています。

印刷 よしみ工産(株) 北九州市戸畑区天神1丁目13-5

福祉用具はあなたの自立をささえます。

あなたのささえがNPO福祉用具ネットを元気にします。

NPO福祉用具ネットは『抱え上げない介護技術』を推進します。写真のような介護はやめましょう。



洗髪シャワー



NPO福祉用具ネット開発品第1号
【製造元】
(株)福祉SDグループ
平成27年より、充電式も発売開始。【発売元】キヨタ(株)

**NPO福祉用具ネットが関わった
主な開発協力品** (現在は製造中止となっています。)



アルファブラ
ソラ クッション

SORA



尿吸引ロボ「ヒューマニー」



特定非営利活動法人
NPO福祉用具ネット

「大切な芽を皆さんのやさしさに包まれながら育てていきたい…」

「食卓」あるいは「食」を巡って

NPO 福祉用具ネット理事長 豊田謙二（熊本学園大学客員教授・博士）

「もひとりの友だち」という活動

1970年代のヨーロッパ、その「食卓」における子どもへの教育という活動が展開されていた。

待ちに待った夏、庭で、ベランダで、あちこちで小さなパーティーが開催される、毎週のように。子どもたちが主人公のパーティーもたくさん開かれる。

そのパーティーの主役である「食卓」に、小さな箱が置かれている。母が子どもに説明する。「もひとりの友だちを招待したけど来れないの」。その席の前に置かれた箱の意味を話す。そして、続ける。「その子は食べるものがないの」「でも来れない、だから、送ってあげたいの」。

子どもはすぐにその意味を察する。子どもだから。そして、自分のバックを開けてお金であったり、ペンダントであったり、それを箱のなかに入れる。パーティーにやって来る子は、次々にその話を子どもから聞きながら、箱に何かを入れる。品物は換金されて「飢餓の子ども」に送られる。

人形を抱えてきた子どもに、母は注意を促す。「あなたが一番大切な人形を頂戴」、要らないものではなく、大切なものを送る。それが「愛」なのだ、と教えるためである。

飢餓を絶滅するために

今日、この瞬間の1時間においても、飢餓のために世界で千単位の子どもの命を絶っているのである。

米も小麦などの穀物生産量は地球の人口を潤すには足りている。なぜ、「飢餓」の子どもに届かないのか。FAO刊行の『世界の農林水産』に世界穀物生産に関する資料(2008 p. 10)がある。ちなみに、FAO (Food and Agriculture Organization) は、国連食糧農業機関であり上掲の機関紙が定期的に発行されている。

その掲載資料の要点だけを示したい。最重要点は小麦・米・植物油などの「一次産品」の価格が高騰している、という事実についてである。零細な生産者は高い穀物を買えないのである。

世界の人口の4分の1は「北」に、4分の3は「南」に住む。収入の5分の4は「北」に、5分の1は「南」に属する。平均寿命は「北」が70歳、「南」は50歳である。繁栄の「北」と貧困の「南」という現実。FAO事務局長ホセ・グラジアーノ・ダ・シルバ氏は信じている。

「2030年までに飢餓を根絶することはまだ可能であることを信じる十分な理由があります。政治的意志が

蒸発していません。それは実際に強化されています。」

私たちが確認すべき点はこのことである。食べることは生きることである。食べて生きることはすべての人の権利である。

だから、食べられない人がいてはいけないのである。

「難民」を支援するために

「難民を生み出す状態内、情勢下に置かれたすべての人は、避難の場を捜し求め、他国内にその避難場を与えられる権利を有する」(『世界人権宣言』第14条)

確認すべき重要ことは、「漂着国の政府は難民を追い出してはならぬ」(「難民国際法」)のである。つまり、重ねて言う。難民救援の受け入れは、人道的以前の国際法上の義務に外ならない。

その「難民」とは、「国籍」を失ったもの、剥奪されたものである。具体的には、「パスポート」を所持しないものである。「パスポート」は、身分証明とともに、「所属国籍」が証明されている。生存を可能にするのは「国籍」の証明にほかならない。

その難民支援についてである。ここにもささやかな活動がある。朝食・昼食・夕食を抜きにして、その支出したであろう金額、それを寄付にあてる活動である。「食べない」ことが体にどのようなストレスを生むのか、そのことが「食べれない」人への理解につながるからである。北の国の「余剰」は南の国の「必需品」なのである。

道のないところに、人道という「道」をつけるには、見えない人を見ようという意志や遠くを見ようとする眼差しが必要とされる。

さて、本NPO法人発行の情報誌『ささえ』は、私たちの活動を介して、支え・支えられる関係を築きたい、というメッセージを開設以来の15年に亘って、読者・会員に向けて発しているのです。



【支えあって】

熊本地震による被災者の「語り」から学ぶ「住まい」のQOL<第4回>

リハビリ・デイサービスセンター「しん」代表社員
杉野哲裕（理学療法士・介護支援専門員・福祉住環境コーディネーター2級）

私は今回の熊本地震により、今まで慣れ親しんだ「住まい」が破壊され、避難所生活、そして仮設住宅へと変わらざるを得なくなった方の「語り」を聞いて、「住まい」に対するQOLの考え方が根本的に甘かったことに気付きました。

通常、私たちリハビリテーションの専門職は、対象となる方々の心身の障がい像を分析し、それに合わせて、福祉用具の導入などの住環境整備を実施します。その対象となる「住まい」は、日頃から住み慣れており、生命が脅かされるレベルから考えることなど、全く思わない認識力でした。

しかし、今回のような未曾有の大地震による被災者にとっては、既存の「住まい」に対する住環境整備のレベルではなく、根本的に生活するためのセキュリティ確保自体が重要で、その例がこれまで紹介した「玄関の鍵」であり、「消火器の設置」でした。それらが示す今回の「語り」は、日頃の「住まい」が全く変わったが故に発想する、生命の安全が先決であるという「住まい」のQOLを示す強烈なものでした。

そのような経過から思うのは、「住まい」のQOLを満たすには先に「安全」があり、その「安全」に基づいて「安心」があるということです。ただし、ここで言う「安全」とは、住環境整備によって、転倒を予防するなどのことではなく、広く生命を保証するための「住まい」全体のことで、それが確保されて初めて、スロープや手すりの設置、あるいはリフトの導入など、私たちが通常行う住環境整備が論議できるのです。

そのような中で、今回の住環境整備としては、浴室やトイレにおける手すりの設置が優先的に行われましたが、仮設住宅への入居当初は全く設置されておらず、町の社会福祉協議会から委託された災害ボランティアの方々が「生活するために必要なもの」についての聞き取り訪問を始めたことで、やっと可能となりました。寝室への介護用ベッド設置も同様です。本当は、手すりや介護用ベッドの設置だけでなく、浴室前の段差を解消することやその他の居室用の手すりも設置したかったそうです。

その時のご夫婦の「語り」では、「仮設住宅という皆が一緒に集っている所だから、『あれもこれもお願いします』とは言えないんです」というものでした。つまり、自分たちだけの居宅であれば、例えば、福

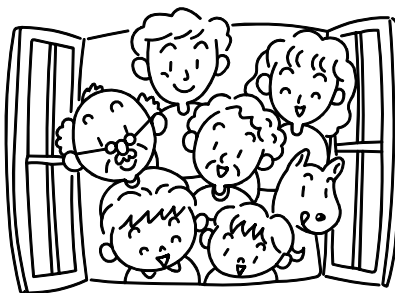
祉用具の導入にしても、自分たちの背景に合わせて解決する方向性が作れます。しかし、今回のような大災害の後の「住まい」では、同じ境遇の周りの方々にも配慮して、自分たちの意思を押さえ込まなければならないということになります。本当に、苦しさを秘めた「語り」でした。

さて、今回のご夫婦のその後ですが、貯金の一部を使って、もとの「住まい」の場所に新居を構えられました。「仮設住宅暮らしは、とても狭くてきつい。もとの場所には家はないけれど、土地はそのままあるから、そこで新しく家を建てます」と決意され、「だから、今まで受けたストレスを吹き飛ばせるように、より体を丈夫にしたいから頼むよ、先生！」と笑いながら話をされた時の「語り」から、私は「住まい」に対するQOLが再び高まり始めたと感じました。

今回、大地震による被災者の様々な「語り」をもとに、「住まい」のQOLについて考えて来ました。そこで、私たちが意識すべきことは、それを充実するためには、第一に生命のための「安全」を確保すること、第二に、転倒防止などの心身のための「安全」を確保すること、そして、それらを達成するために、多彩な引き出しをもったプロが道作りをすることです。また、その道作りのプロとしての価値を高めるきっかけは、常に対象となる相手の「語り」が基本にあることは間違いありません。

<追加>

今回、ご協力頂いた被災者のご夫婦の話から、「ぜ



ひ、仮設住宅の状況を周囲にお伝え下さい」という別の「語り」を頂きました。それは、仮設住宅における

浴室は、浴槽縁までの高さが高いために、入居以来、一度も浴槽に入れられない一人暮らしの高齢者がいることです。入浴は、「住まい」におけるQOLの重要な要素です。このように、仮設住宅という「住まい」の中で、いつまでも気付かれていないQOLの低下が多くありそうです。

患者家族でもきづいてしまった医療現場でのヒヤリハット

～患者家族の声～ 患者家族Cより

親が5カ月ほど入院しました。この入院生活の間に目を疑うようなことが親の身におこりました。一般的にこれを「ヒヤリハット」というのでしょうか。医療現場ではなにをもって「ヒヤリハット」というのかわかりませんが、私は「ハットしてドッキリ」しました。患者家族でもきづいてしまった医療現場でのヒヤリハット。ひよっとしたら氷山の一角なのではないでしょうか。気づいてもらえない苦しい思いをしている方々がもっといそうな気がしてなりません。

①経管栄養中の痰吸引

「危険なのでやめて」と言うと、「管が入るから大丈夫ですよ。」と言われ栄養を流したまま痰吸引を継続されました。専門家にそういわれるとそれが正しいのかと思います。気づいているはずのもう一人の看護師さんが止めなかったのはなぜでしょうか。

②麻痺側を拘束

原因は、検査の際、拘束帯をベッド柵にぶら下げたままベッド柵を外して検査に行き、戻ってきた時、ベッド柵を元と反対側に設置したため間違えて麻痺側にベルトをしてしまったからだそうです。

③エアマットの電源を入れ忘れ

仕事が終わり病院へ。親の体がいつもよりも沈みこんでいました。普段と違う親の姿勢のおかしさはすぐに気づきました。ベット周囲を見て回りました。エアマットの電源が入っていませんでした。親の仙骨部は底付していました。この数日後、褥瘡が発生しました。環境が変わったときリスクが高まる要因の一つに、担当スタッフが変わることもあるとは！医療現場を信じていた家族としては衝撃的でした。病院にいるからといって気が抜けない、いつも気を張っていないと危険だなと思知らされました。

④二週間近くの留置針忘れ

健側足首に忘れられていました。浮腫がひどく足首にしか点滴を落とせませんでした。しかし、浮腫がひきしばらくたっても針が外れませんでした。てっきりまだ、点滴が続いていると思っていました。違いました、点滴はとっくにされておらず、ただ針を忘れられていただけでした。

⑤褥瘡発生の報告なし

ある日、親のベッドサイドに褥瘡の治療用石鹸が置かれていました。褥瘡があるのかなと思数日後、看護師さんに確認しました。やはり褥瘡がありました。

家族が聞くまで説明がなかったことに不信感を持ちます。私たち家族は交代で日に三回面会に行っていました。スタッフはいつでも私たちに説明をするチャンスがあったはずなのに説明がありませんでした。

⑥褥瘡発生の共有不足

・夜勤帯は危険でした。褥瘡があることを認知していないスタッフは親を仰臥位にし、3時間の栄養と水を開始しようとしました。褥瘡があることを慌てて伝えると、「え？おいちゃん褥瘡あったっけ？」という言葉が看護師さんから返ってきました。

・一瞬のことでした。褥瘡のある親の脇を持ち頭方向にずり上げました。力が抜け言葉が出ませんでした。これが原因かどうなのか、その後、褥瘡範囲は大きくなり、裂けたようになっていました。

⑦リンクしていない体重測定とエアマットの体重設定

体重測定をしてもエアマットの体重設定が3か月間変更されませんでした。当初設定が50kgで、その後、体重が40kgを切ろうとしていても、設定は同じでした。さすがに危機感を感じ、看護師さんに申し出たところ、「調整しましょうね」とのこと。しかし、翌日になっても調整なし。業を煮やし別の看護師さんに申し出ました。その人は指一本で設定を変えました。一瞬です。ピッ！「え——！？たったこれだけでできることができていなかったのか！」こんな時、家族は後悔します。「もっと、早く言っておけばよかった」

⑧除圧グローブの危険な使い方

持参した除圧グローブを使ってくれるものの、褥瘡部をゴシゴシする人がいました。使い方はわかっている、意味が分からないまま使用している実態がありました。褥瘡が心配でした。

私はこのような出来事を見つけるたびに、ため息が出ました。言おうか言うまいか、病室内をウロウロ歩き回り、部屋を出たり入ったり。毎日、面会に行くとスタッフさんとも仲良くなることができました。仲良くなりながらも、神経をピリピリさせてあれやこれや注文を付けることはとても気を使い、精神的にも疲れました。スタッフの皆さんもやりづらさも感じられていたと思います。でも、注文を付けざるを得なかった現実もそこにはあったことをお伝えしたいと思書かせてもらいました。

抱え上げない介護技術の普及に向けて ～佐賀の活動～

宇都宮病院 塚原大和

(理学療法士 佐賀あたりまえケアネットワーク 代表)

はじめまして。私は佐賀県唐津市にある療養型病院で理学療法士をしています、塚原大和と申します。

私が働く病院の介護療養病棟は、入院患者 50 名中約 30 名が経管栄養(経鼻・胃ろう)による食事、平均介護度 4.5 という状況です。寝たきりならぬ、寝かせきりの患者さんが多く、ほとんどの方が褥瘡や拘縮を引き起こすリスクが高い、そんな現場です。

自分が患者さんに関わる中で多少その方の身体の筋緊張が和らいだとしても、数時間後には元通りカチーンと筋緊張が高い状態に戻っている…こういった患者さんを前に、自分は理学療法士として何ができるだろう…悩んでいたときに出会ったのが、新潟県の理学療法士・大淵哲也先生、高知県の理学療法士・下元佳子先生でした。お二人からは、姿勢づくりや丁寧な動作介助の大切さだけでなく、福祉用具の活用方法について、またそれを職場や地域で広めていくことがいかに大事かを学ばせていただきました。

2016 年 1 月、私は高知県の下元先生のもとに 1 週間見学にいきました。当時の私は、ポジショニングや動作介助など自分の技術を磨きたい、そういう気持ちだけで見学に臨んでいました。しかし、高知県で学ばせていただいたのは、行政と一体になって県下全域に快適なケアを広めていく「高知家統一基本ケア」や「ノーリフティングケア研修」、「高知福祉機器展の開催」といった地域をつなげる、巻き込んでいく取り組みでした。このとき、私は自分の技術を高めたいという気持ちだけで高知県に行ったことを恥ずかしく思い、同時に佐賀県でも高知県と同じことをやりたいと思いました。

その後、佐賀大学医学部の松尾清美先生、スマイルストーン石橋弘人さん、コネクトリハビリテーションの山形茂生さんにサポートいただき、2017 年 3 月に「佐賀あたりまえケアネットワーク」というボランティア団体を立ち上げました。この団体が活動する目的は、「高齢者や障がい者(児)、傷病者があたりまえのケアを受け、かつ支援に関わる全ての人々が健全な生活ができるようにする」です。主な事業として、抱え上げない介護技術普及事業、あたりまえケア普及リーダー育

成事業、佐賀福祉機器展を計画しています。

抱え上げない介護技術普及事業では、県内 5 か所の保健所管轄区域それぞれで 1 時間半の導入研修と 1 日研修を行い、その数か月後にフォローアップ研修などを行う予定です。

あたりまえケア普及リーダー育成事業では、高知家統一基本ケアをモデルに「地域を知る」・「権利擁護」・「組織とチーム」・「健康管理」・「介護予防」・「姿勢と動き」など全 15 項目を伝えるリーダーを養成するために、高知県から講師をお招きし学ばせていただきます。そしてメンバー内で反復して学習し、伝える人を養成していきます。

佐賀福祉機器展では、これも高知福祉機器展をモデルに、メンバーが主体となって各福祉用具・機器のことを伝え、相談に乗り、必要とするユーザーとものをマッチングできるような仕組みをつくりたいと考えています。

この団体が前に進む大きなきっかけになったのは、昨年 9 月・10 月に NPO 福祉用具ネット主催で開催された、抱え上げない介護技術セミナーでした。ここに参加してくれたメンバーが、現在のコアメンバーと一緒に動いてくれています。佐賀から参加してくれたメンバーは、みんな同じ思いや目的を共有した信頼できる仲間です。それぞれがどうすれば介護の現場をよりよくできるか、介護を魅力ある仕事だとアピールできるか、地域を変えていけるか、真剣に考えてくれます。



【10 月】抱え上げない介護技術セミナー 3 部

メンバー内には理学療法士や作業療法士がいて、佐賀県理学療法士会のリハビリテーション介護技術研修会(9月・11月)や、佐賀県リハビリテーション3団体協議会の介護技術研修会(1月)では、それぞれが講師やベッドタスクとなり抱え上げない介護技術の普及に尽力してくれました。



【11月】佐賀県理学療法士会
リハビリテーション介護技術研修会



【1月】佐賀県リハビリテーション3団体協議会
リハビリテーション介護技術研修会

抱え上げない介護技術セミナー以降、毎月2回佐賀市と唐津市にて同じ内容での復習会を行ってきました。これは県内各地域で伝えるリーダーを養成するためです。復習会の中で課題として挙げたのが、それぞれの伝え方やポイントがバラバラだということ。これを克服するためにコアスタッフの一人が、抱え上げない介護技術の各項目の技術・伝え方チェックシートを作成してくれました。これをもとに反復練習をし、佐賀あたりまえケアネットワークで企画している抱え上げない介護技術普及事業をメンバーで協力しながら行っていきたいと考えています。

また、唐津の「看護小規模多機能 むく」では、だれでも学びたい人が参加できるオープン型の研修会が開催されています。こういった動きが県内の他の地域でも広がっていくよう、リーダーの養成や研修会の仕組みづくりにも力をいれたいと思います。



【唐津市【看護小規模多機能 むく】での研修会】

佐賀の課題はメンバーに介護職・看護職が少ないこと、県内にモデルとなる施設がないことです。より多くの介護職・看護職の方々がメンバーに入り、伝える人として一緒に活動してくれたら…そしてひとつでもふたつでもモデル施設ができてくれれば…県内での抱え上げない介護の普及はよりスピード感をもって進んでいくと思います。

抱え上げない介護技術セミナーのおかげで、福岡、大分、熊本など同じ思いを持ち、切磋琢磨しながら進んでいく仲間ができました。それぞれが刺激し合いながら、励まし合いながら、高知県みたいな誰もが安心して生活できる地域づくりをしていきたいですね。これからもどうぞ宜しくお願いいたします。

今回は、昨年の9月の抱え上げない介護の研修会で繋がった大切なネットワークである佐賀県のチームリーダーの塚原大和さんにメッセージをお願い致しました。快諾して下さった塚原さんに心より感謝申し上げます。

あの時、繋がった絆、大切にしたいと思います。これからも宜しくお願い致します。

事務局 大山

「抱え上げない介護技術を当たり前のケアに」

NPO 福祉用具ネット事務局長 大山美智江

昨年の9月と10月から本格的に取り組みをスタートした『抱え上げない介護を当たり前のケアに!』の活動は各地域ごとに指導者やリーダーが中心となって頑張っています。

チームの皆様は『サイボウズ』というネットワーク環境で情報を共有しています。さらにフェイスブックでは全国の動きを知ることでもできますし、事務局長のブログでも活動状況を出来る限り発信するようにしています。

こんなニュースを知っていますか？

◆高知県では特別養護老人ホームや老人保健施設、障害者施設の3分の2がノーリフティングケアに取り組み、モデル施設を追隨するレベルになった施設も既に10カ所ほどある。

人材確保対策にも良い効果が出ている。高知市内の施設では、求人に対して3～4倍の求職者があり、入職試験ができるようになってきた。

◆高知県中土佐町の特別養護老人ホーム「大野見荘（豊島知章施設長）」は、2016年度に県が進めるノーリフティングケアのモデル施設に指定された。利用者を人の手で抱え上げたり、引きずったりしないケアの大切さを学び、全体化することで同荘のケアは一変。移乗などのケア時に腰痛になる職員はいなくなり、褥瘡や拘縮などの2次障害防止につながるなど好効果をもたらしている。

◆高知県のノーリフティングの事業、福祉用具購入補助金の予算が倍額になった。

その取り組み内容は

- ・医療や介護などのサービス提供を担う人材の安定確保と産業化
- ・働きやすい職場環境づくり
- ・福祉機器等の導入支援を抜本強化
- ・業務効率化による生産性向上

◆そして、30年度からは大分県も抱え上げない介護に向けた予算が決まったそうです。

大分県高齢者福祉課の『介護労働環境改善事業』
《介護職員の負担軽減を図るため、介護時におけるノーリフティングケア（抱え上げない介護）を推進するとともに、介護ロボットの導入支援を行う。》と記載されていました。

◆3月16日に開催された佐賀県唐津労働基準監督署主催の職場の腰痛対策セミナー

私たちは介護・看護の腰痛対策にどう取り組んでいくべきかについて、パネルディスカッションが開催されました。

NPO チームの抱え上げない介護の取り組み紹介

サイボウズに具体的に研修会開催の報告があったもの

12月3日(日)抱え上げない介護技術学習会一日研修会

12月13日(水)福岡市クオリティー事業所研修会

12月20日(水)社会保険田川病院ポジショニング研修会

12月18日(月)社会保険稲築病院での職場研修会

12月25日(月)飯塚市ベストライフ職場研修会

1月16日(火)嘉麻市ケアマネ研修会

1月28日(日)抱え上げない介護技術学習会一日研修会

3月3日(土)福祉用具事業所職場研修一日研修会

3月18日(日)抱え上げない介護技術学習会一日研修会

3月24日(土)行橋地域ノーリフティングケア研修会

100人体制でスタートしたチームには、中心となる指導者1名、支えるリーダー2名がいます。つまり、3人一組で活動をしています。

さらに地域を取りまとめる地域リーダーがいます。NPO福祉用具ネットチームは2つの地域チームを作っています。飯塚・嘉麻市・福岡方面を海尾リーダーが統括し、田川・京築・直方方面は井内リーダーが取りまとめています。

これまでに、新規に仲間に入ったメンバーの方もいます。興味のある方ならどなたでも歓迎し、仲間づくりを進めています。

今後、引き続き定期的な技術研修会を継続します。興味のある方はNPO福祉用具ネット事務局にお問い合わせください。

9月15日・16日・17日の3日間はチームの成果発表会、さらには新規の仲間づくりのために下元佳子先生がいらしていただけることが確定しています。

平成30年度特別企画

●平成30年9月7日(金)・8日(土)

おむつファイター3級研修会 申込受付中

講師 むつき庵 浜田きよ子先生他

●平成30年9月15日・16日・17日

抱え上げない介護技術スペシャル研修会

講師 下元佳子先生他 (詳細は次号で公開)

いよいよ、新年度がスタート

事務局だより

《30年1月から3月までの事務局のうごき》

平成29年12月の追加

- 12月12日 企業開発支援 福岡
- 12月13日 福祉用具ニーズ調査ヒヤリング
- 12月13日 事例相談
- 12月14日 研修会打合せ
- 12月15日 研修会打合せ
- 12月20日・21日 開発相談
- 12月22日 開発相談
- 12月25日 開発相談
- 12月26日 開発相談
- 福岡9月24日 リハ学習会

情報誌ささえ62号発送

平成30年1月

- 1月5日 夕方から高知へ
- 1月6日～8日 高知合宿研修
- 1月10日 福祉用具ニーズ調査3件 嘉麻市桂川町
- 1月11日 福祉用具ニーズ調査2件 飯塚市
- 1月15日 研修会打合せ ニーズ調査
- 1月16日 福祉用具ニーズ調査 3件 志免町
- 1月17日 福祉用具ニーズ調査 3件 北九州市中間市
事例相談
- 1月18日 検証相談打合せ ヒヤリング結果の検討
- 1月24日 開発相談
- 1月25日・26日 開発相談
- 1月26日 事例相談
- 1月28日 開発相談 抱え上げない介護研修会
- 1月29日 福岡県との打ち合わせ
- 1月31日 福祉用具ニーズ調査 3件 福岡市

平成30年2月

- 2月2日 開発相談2件
- 2月4日 事例相談
- 2月5日 開発相談
- 2月8日 開発相談
- 2月13日 開発相談
- 2月14日 開発相談
- 2月15日 福祉用具ニーズ調査2件 福岡市/飯塚市
- 2月16日 開発相談
- 2月19日 開発支援
- 2月20日 福祉用具ニーズ調査2件 柳川市久留米市
- 2月21日 事例相談
- 2月22日 研修会打合せ
- 2月23日 研修会 事例相談
- 2月24日 事例相談

- 2月25日 福祉用具ニーズ調査 福岡市
- 2月27日 開発相談
- 2月27日・28日 開発相談
- 2月28日 開発相談

平成30年3月

- 3月2日 開発相談
- 3月3日 研修会
- 3月6日 開発相談
- 3月18日 学習会
- 3月21日 理事会

情報誌ささえ63号 編集・校正・印刷・発送準備

《今後の予定 4月から6月まで》

4月 福祉用具研究会

4月19日～21日 大阪バリアフリー展

4月28日 理事会

5月19日 キネステ体験講座

5月26日 総会

6月 情報誌64号発行準備

随時、抱え上げない介護のための学習会を開催します。
開催情報は、『事務局長のブログ』コーナーで公開します。

平成30年度通常総会のご案内

日時 平成30年5月26日14時～16時予定

会場 福岡県立大学3号館1階3109教室

◆審議事項

平成29年度事業報告・決算報告

平成30年度事業計画案・予算案

役員改選の件

出欠届及び欠席の方は委任状の提出を5月15日までに提出していただきますようお願い致します。

平成30年度新規会員募集・会員継続のお願い

NPO福祉用具ネットの活動に賛同して下さる会員様を募集しています。

また、現会員の皆様は、新年度の会員更新手続きをお願い致します。

継続会員の皆様は、年会費を4月末までに振り込んでいただきますよう何卒、宜しくお願い致します。

新規会員の方の入会金・年会費

個人会員入会金1,000円 年会費4,000円

合計5,000円

団体会員入会金2,000円 年会費30,000円

合計32,000円

入会申込書はホームページより入手できます。